



いとう



海援隊旗(二隻きの旗)

http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~ryoma/



いくら見ても見飽きない一枚の写真があります。三家族十四人が並んだ坂本一族の写真。
明治三十一年(一八九八)春に、坂本直寛が一家で北海道へ移住するときに撮ったものです。

彼らは龍馬の子孫です。龍馬が「お国の安田(安田町に住む)順藏さん」と慕った義兄・高松順藏と長姉・千鶴の子どもたち。龍馬がかわいがった姪の春猪もいます。時代は幕末から明治へ。しかし、武家の誇りを持って生き抜いた男や女たちの肖像は、かつてこの家族の中に龍馬が生きていたことを教えてくれます。もし龍馬がここにいれば六十三歳。この写真に写っていて何の不思議もありません。

カメラに向けた彼らのまなざしの中に龍馬を感じ、家族の絆の強さを感じるのは私一人ではないはず。写真をただつていくと、族の人生とともに家族を愛してやまなかつた龍馬のシルエットがはつきりと浮かび上がります。

龍馬の夢であった北海道への移住を果たした彼らのドラマは、決して平坦なものではありません。龍馬と行動をとるに、龍馬の遺蹟を継いだ坂

援隊の物語を、半年にわたりお伝えします。

展示資料には本邦初公開のものも含まれています。中でも桂浜の坂本龍馬像の原型は必見です。原型である本山白雲の木像は、制作以来、龍馬像建立八十周年にして初めて公開されます。白雲の気迫とやさしさを感じてください。

開催にあたりまして、坂本家(札幌・東京)、弘松家(フランス・高知)、高松家(高知県香

龍馬をめぐる人々の物語 家族の絆 海援隊 約規物語 展開催



南市)、本山家(神奈川県)、浦白町立浦白小学校(北海道樺戸郡)、浦白町郷土史料館(同

本直や、自由民権運動からキリスト教徒として人生を懸けた坂本直寛。高松順藏という知識人を親に持つ彼らが、坂本家を継ぎ、龍馬精神を受け継いでいった時間の行方は…。

北海道移住を機に新しく展開する一族の歴史。龍馬と海援隊約規を軸にして、坂本家、高松家、弘松家の人々と海

などのご協力、各所のご指導をいただきました。心より感謝申し上げます。
前田 由紀枝

〈展示資料〉

- 海援隊約規 (慶応三年四月)
- 龍馬書簡・高松太郎宛 (慶応二年三月八日)ほか
- 坂本龍馬銅像原型 (昭和初期、本山白雲作・木造)
- 坂本龍馬肖像油彩画 (明治三十七年、林竹次郎画)
- 坂本龍馬肖像画 (公文菊徳画、東郷平八郎讚)
- 勝海舟ほかの肖像画 (公文菊徳画)
- 坂本龍の帯留
- 高松太郎氏名票
- 勝海舟の書 (明治十四年、龍馬没後十五年を偲んで)
- 西郷隆盛、土方久元らの書 など

- 会期/10月1日(水)~来年3月22日(日)
- 前期/誇りに生きる(一族の証) 10月1日~12月25日
- 後期/海援隊魂とは(ひたすら、熱く) 12月26日~3月22日
- ★歴史探訪バスツアー 龍馬の子孫のルーツをたどって 安田・田野町へ(2月予定)

「坂本龍馬記念館・現代龍馬学会」立ち上げGO!

龍馬に学ぶ
混迷の現代を生き抜くヒントを

何か手に負えないとつてもないことに挑戦しているのではないかと、思う一方、記念館として当然やるべきアプローチだと込み上げてくる思いがある。その勢いに押されて踏み出した。来年4月を目標に「坂本龍馬記念館・現代龍馬学会」がスタートすることになった。

世相の混乱は目を覆うばかり。政治、経済、社会すべてにゆがみが生じている。それは毎日のニュース報道で周知の通りだ。裏付けるように入館者の皆さんが、龍馬に寄せるメッセージ

「拝啓龍馬殿」の中で目立って多いのが「平成の龍馬出現を待つ」というものである。「龍馬さんこの世の中どう見ますか?」「見ていただ

くのに恥ずかしい日本になつています」など嘆かわしい現状を訴える声が高い。こうした世相、また年間約13万

人に上る入館者のある館としては、待つ姿勢ではなく前が出る、館から発信していく姿勢を基本に活動を展開している。現代龍馬学会立ち上げはそんな背景あつての結



果だ。

狙いとするところは、歴史的事実の解釈である。それに基づく空想が、肝心の歴史事実や判断までを狂わせてしまい混乱を招くといつた事態も起きている。謎の多い龍馬ですよ、で済ませられぬケースもある。そこで、こうした混乱に対

して単に研究というスタンスではなく、あの殺伐の時代に生きた龍馬の人生が、複雑な現代を生きる上でどう生かせるのかまで視野を広げた議論を深めていく学会を目指している。

それだけに、歴史研究者はもちろんのこと、マスコミ、教育、芸術の各関係者、さらに龍馬会の方々にも参加してもらおう。地元、浦戸出身の歴史研究者・永国淳哉氏、高知県立歴史民俗資料館館長・宅間一之氏、当館学芸員らを中心に発起人幹事会も終わり、今後の方針など検討している。

来年4月、全体総会をかねた第二回目の学会を開催する。研究発表を行い、その結果をまとめ紀要で発表する。また、その内容は、館の機関紙(年4回発行)「飛騰」でも集録していく。そのために飛騰の増ページ(8ページ)も検討するなどを申し合わせた。

学会立ち上げについて龍馬記念館の森健志郎 館長は「待望の学会です。多くの人の協力で龍馬精神を目指す。更なる館の充実のために、まさにそれが「龍馬精神」だと思う」と話している。

前進あるのみ

広く龍馬をアピール
小学2・3年生に龍馬紙芝居も



平成20年度第二回龍馬記念館運営協議会は9月2日、桂浜荘会議室で開かれた。再来年度のNHK大河ドラマ「龍馬伝」に決定したこともあり、このチャンスはどう生かし、さらに龍馬思想の普及に繋げていけばよいか、熱心に話し合った。

年度最初の会とあつて6人の委員さんと事務局から館長、学芸員ら4人の10人が全員出席。まず、新委員の歴史研究者・永国淳哉氏、三里小学校長・川崎二三雄氏が紹介された後、会長に片岡雅文(高知新聞編集委員)氏、副会長に川崎氏を選んで議事に移った。

世相の乱れから現状を憂う声が続出、だからこそ龍馬思想、教育が必要だと意見が一致、具体的に何をすればいいのか議論は深まった。

その中で、子供教育の大切さが一つ焦点になった。廣谷郷土歴史研究会委員からは「子供に龍馬の魅力を語り継ごう。せめて3分間大人は龍馬を話せるようになるべきだ」との意見が出された。館でも「子供への『龍馬普及』は重点目標に捕らえており、県下の小学校2、3年生を対象に紙芝居によるPR隊プロジェクト計画を進めているだけに、大いに盛り上がった。

また、龍馬伝に絡んで、橋本(全国龍馬社中会長)委員からは、「龍馬記念館は動いている。評価できる。そのパワーをさらに『龍馬伝』では発揮してほしい」とエールを送られた。

森 健志郎

愛好家の協力で成る

幕末土佐の刀剣と鐔展 平成20年9月1日~9月30日

今回の展示の特徴は、「幕末の志士の誰々が持っていた刀」というものではなく、「幕末土佐にどういった刀工や鐔師がいたのか」ということにスポットを当てたものである。土佐武器研究会の公文氏が企画や



迫力満点の日本刀

龍馬は大の刀剣好きで、残された手紙の中には数多くの刀剣や鐔の話が出てくる。本展は、龍馬が活躍した時代の土佐の刀剣と鐔を集めた展示である。このように、幕末土佐に限定した刀剣と鐔展は県内初の試みとなった。刀剣は五十五振り、鐔は製作工程の物も含めて六十八枚を展示した。所せましと刀剣や鐔が並んでいる様は圧巻だった。

準備を行ってくださった展示で、公文氏のこれまでの研究成果や人脈を総動員した展示となった。

当館の立地条件は、刀剣類を展示するに相応しいとはいえず、展示作業は困難な作業になるだろうと覚悟していた。しかし、日本美術刀剣保存協会の香川県支部長や高知県支部の方々、北川村史談会の方々の協力により、驚くほどスムーズに展示が行われた。こうした様々な人のご協力があったからこそ成し得た展示であった。

刀剣のみどころ

五十五振りの刀剣の内、特に注目して欲しかったのは、三人の刀工の作だった。

まず、幕末土佐の志士たちが好んで持っていた「氏詮」である。氏詮は本名が中島門造、安芸郡田野村(田野町)の出身で、代々刀工の家に生まれた。野根山二十三士が土佐藩から追われた時、同じ刀工である正宣(小松如意助)と共に救出しようとしたように、義侠心に溢れた人物である。二十三士の中には、氏詮に刀を作ってもらった人が何人かいる。その中でも、副首領に当たる清岡治之助(正道)の短刀を今回展示した。刀身に漢詩と和歌が彫られたもので、注文票も残っている。

「玉はこの道を分け行くものふの やまと心はおれずまがらす」

強い気持ちを持って、時代を切り開いて行こうとする治之助の心意気が明確に伝わる歌である。

次に、やはり龍馬の刀というところ、誰もが思い付くのが「吉行」である。吉行の活躍時期は幕末ではないが、龍馬が最後に持っていた刀ということで、今回は特別に展示した。吉行は、本名が山岡平助、大坂の出身で二六七〇年代に招かれて土佐へやって来た。龍馬は兄権平に、「国難に臨む時には何か先祖の物を身につけていたい」と手紙に書き、坂本家ゆかりの刀を求めた。それに対して権平が選んだ刀が吉行だったのだ。今回は刀と脇差を展示した。

それから、幕末期の刀工として、全国でも三本の指に入る「左行秀」は、本展の目玉であった。行秀は槍も含めて全部で九振り展示した。筑前の出身だが、土佐藩のお抱工となり、龍馬の家のすぐ近くで刀を鍛えた。龍馬も行秀の刀を持っていたといわれている。その他、左行秀の弟子の正宣や秀近、秀弘、南海太郎朝尊や甥の恒吉、朝尊の弟子の決雲軒義正、正甫、助秀や紫虹子寿秀、寿秀の弟子の信秀、勝廣などを展示した。

鐔のみどころ

鐔は土佐を代表する鐔師である川崎家代々の鐔を中心に展示した。公文氏いわく、「鐔は今ではネクタイにあたるような物」で、TPOに合わせて変えたようだ。鐔は彫られている画題を読み解くと非常に面白い。刀の出来は詳しい方ではないと分かりにくい世界だが、鐔は多くの方が楽しんでご覧になっていた。



鐔は武士の「ネクタイ」だった

今後の課題

今回は刀工や鐔師にスポットが当たっていたが、次の機会には「幕末の志士と刀」というように、所有者を調べて展示ができればもっと面白くなるかと考えている。

今回の展示では多くの人との良い出会いがあった。これは大きな収穫であり、この出会いを大切に、今後の展示に繋げていきたい。

三浦 夏樹

坂本龍馬先生銅像建立八十周年記念によせて

特別仕様こだわり龍馬像 興味深い苦勞話に感動。



吉松 靖峯

桂浜にある坂本龍馬先生銅像は、本年建立八十周年を迎えました。思えば私と龍馬先生の銅像との付き合いも長くなってきました。

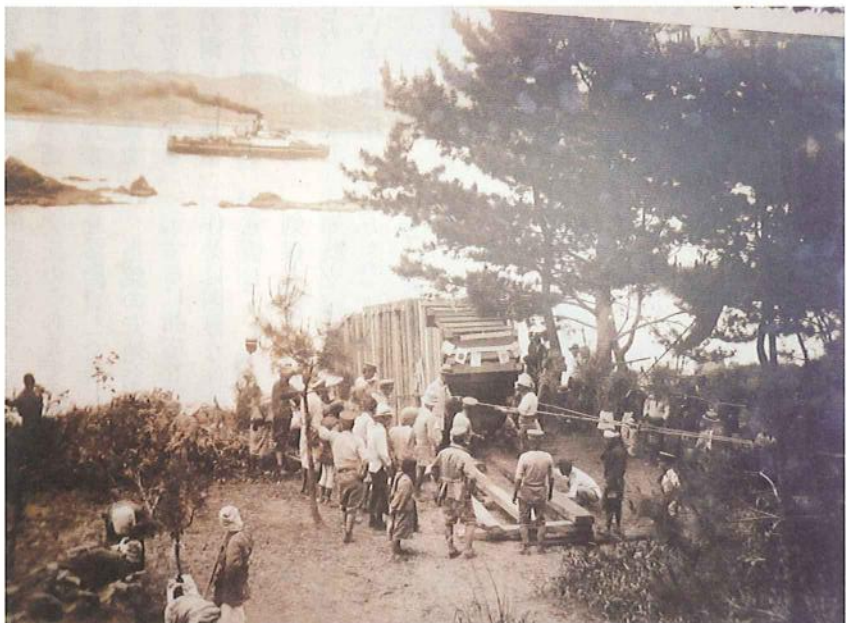
四年前、「龍馬像は誰がどこで铸造したのか」という質問をされたとき、宿毛市出身の彫刻家・本山白雲先生が原型を作られたことは知っていても、铸造所についてはほとんどの人が知らないことに気づきました。

調べてみると、昭和三年（一九二八）、角川铸造所（東京都北区上中里）の角川健治氏が铸造したということが分かり、二ヵ月後に私は現地に出かけました。铸造所は今も続いており、息子の角川作太郎さん（91）、喜さん（80）に貴重なお話を伺うことができました。

作太郎さんは铸造当時十一歳。「日本一の銅像を铸造するのだ」と張り切っている父・健治氏の铸造作業を毎日見ていたということです。

通常の銅像の型は石膏と木で作りますが、白雲先生のこだわりから龍

馬像の型は石膏の代わりに漆喰が使われたそうです。漆喰からの型抜き



栈橋からはしけで桂浜に着いた龍馬像は、人力で台座まで運ばれた。昭和三年（1928）5月23日、桂浜で

の難しさに加え、大型で重量のある龍馬像は足元の铸造には細心の注意を払わねばなりません。また、溶かした銅を細部にまで流れ込ませるため、銅には鉛が混ぜられるなど通常と違う方法が用いられました。

龍馬像の大きさの苦勞もあります。

吹き抜けの木造二階建ての工場では立てたまま組み立てることができず、横に寝かせて組み立てたこと。貨車に乗せて神戸まで運ぶとき、トンネルが通過できるような

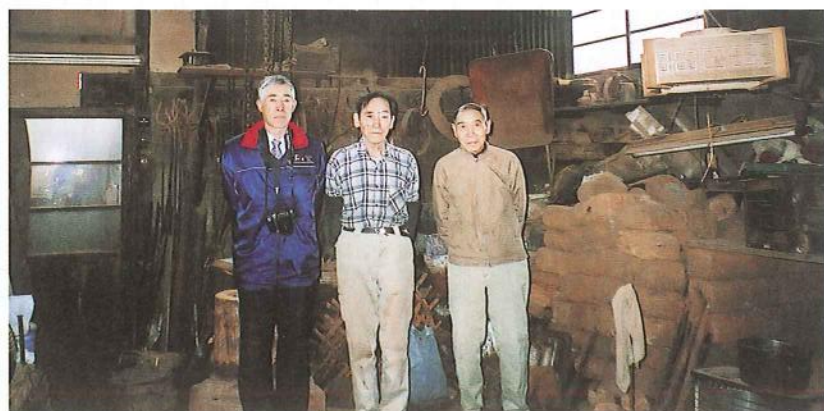
木材梱包に工夫したこと。完成までに時間がかかり、除幕式に間に合わせるために軍の協力を得て搬送したことなど、興味深い話はかりでした。

田中光頭伯爵（陸援隊幹部・佐川町出身）

もたびたび铸造所を訪れていたそうです。

龍馬像建立後に制作した陸援隊長・中岡慎太郎の銅像も、同じ本山白雲先生と角川氏コンビによるものでした。田中伯は慎太郎像を見て感極まって涙を流したということです。

昭和三年五月十七日、



角川作太郎さん（右）、喜さん（中央）と並ぶ筆者＝平成16年（2004）、角川铸造所

铸造所を出た龍馬像は東海道本線で神戸まで行き、神戸港から浦戸丸で高知市潮江栈橋へ。船に移されて桂浜まで運ばれた後、人力で設置され、二十七日の除幕式を迎えました。もちろん田中伯も臨席されました。父・健治氏の作業を目の当たりにしていた角川作太郎さんや喜さん。ご高齢になられたとはいえ、八十周年というこの機会に父・健治氏が作った日本一の銅像を一度ご覧いただきたいものです。

高知さんさんテレビ・ニュース特集

「龍馬とわたし」オンエアに寄せて

桂浜の魅力、語れますか？

高知さんさんテレビ・アナウンサー

齋藤 晴江



高知県にやってきたばかりの五年前のことです。今でもショックで忘れられないことがあります。それは、高知の人たちに桂浜がとても素敵だったと話をすると「ほとんど行かないから」「大したことないよ」などと言われたことです。

桂浜の魅力伝える機会がないものか：そう思い続けてきた私に、ある情報が入ったのは、今年の一二月でした。

坂本龍馬記念館が、今年七月末に発刊した本「ほいたら待ちゆうき龍馬」。「飛騰」でもお馴染み記念館に投函された龍馬宛ての手紙が掲載されている本ですが、これを発刊する龍馬記念館の取り組みを取材してみないかということでした。

手紙を書いた人が必ずといっていいほど訪れている桂浜の龍馬像。一通一通に、銅像があたかも龍馬自身であるかのようなメッセージ

が綴られています。ニュースとして報道するにあたって桂浜の龍馬像の



手紙の筆者から話を聞く。皆さん熱かった。

魅力というものを自分なりに検証してみようと考え、他県の龍馬像や、関連施設も撮影して回りました。

円山公園にある有名な龍馬像は、非業の死を遂げた京都にあるからか、険しい表情に見え、私の中で「素敵」という言葉は当てはまりませんでした。お墓も、決して気分を明るくしてくれるもので

はありません。誰もが知っている、上野公園の西郷隆盛像に立ち寄りてみると、すぐ後ろがビル街で、空しさを感ずりました。

桂浜の龍馬像自体の芸術性のすばらしさにも気が付きました。カメラのファインダーを幾度も覗きましたが、後ろから、下から、そして高所作業車で近くにいっても、どこからどう狙っても格好良いのです。

わかったのは、やっぱり桂浜の龍馬像は他とは違うということでした。あの銅像は昔も今も変わらない桂浜の景色とともにあるから、沢山の人を魅了し、手紙を書かせているのだと思います。

八十年前に作られたとは思えない桂浜の景色と一体となった芸術が、これからもずっと生きつづけてほしい。ニュース特集の放送はこの八月で終わりましたが、一時間の番組にすべく取材続行中。高知県民代表として、桂浜の魅力为全国発信する予定です。

全国各地の人が感動している桂浜。その、普遍的な魅力を、あなたなら、どんな風に語りますか？

「ほいたら待ちゆうき龍馬」取材記 肌を感じる熱い思い

「龍馬へのメッセージはそのまま龍馬からのメッセージだ」という思いで、一年前の初夏から「拜啓龍馬殿」を二冊の本にするという作業が始まりました。すべてのメッセージを読み、三千人の方に手紙を出し、返ってきた近況欄には、寄せられたメッセージ以上にさまざまな龍馬への思いと人生がありました。彼らに会って話を聞いてみたい。そんな思いが湧いてくるのは自然なことだったのかもしれない。

記念館から訪ねて行って話を聞いてみよう。思いが形になつて、九月、市川榮五郎さんのインタビューを皮切りに、各地の方を訪ねる旅が始まりました。誰に会うのか。メッセージの入力作業の中で、各年一人、性別、年齢、地域などを絞り込んでいきました。

そうして、企画展の出展に合わせ、初めて福岡で取材をした日のことを忘れることができません。正月気分を抜けない博多の小さなホテルのロビー。息を弾ませて入ってこられた林田さん親子の興奮は、そのまま私の気持ちでもありました。

三ヵ月をかけて各地に出かけました。その方が生活する土地で、その人生に触れる作業は感動的でした。三度目の取材からは、さんさんテレビの齋藤アナウンサー、カメラマンの方が一緒になり、かなりタイトでハードな取材となりましたが、彼女たちとの仕事はとても楽しいものでした。その様子は、出版に合わせて七月から八月にかけてテレビ放映されました。取材をして原稿を書くという作業は、生きるとは何か、人生とは何かということを私自身がじっくり考えた、考えざるを得なかった貴重な時間でした。

今ここに多くの仲間がいて、龍馬は今も生きています。生きることに迷い希望を失いかけた人たち、夢を描き続ける人たちに、そんな感動が「ほいたら待ちゆうき龍馬」を通じて広がっていくことを切に願っています。

前田 由紀枝

拜啓龍馬殿 127通

6月21日～9月20日

33歳で歴史に残る人生
をおくるとはどんなことでしょうか。僕は今13歳です。まだ20年あります。これこそ僕の人生だと言えるようにがんばります。またいつかお会いしましょう。
(7月25日 ドイツ K.R 13歳 男子)

あなたのことは全然知りませんでした。興味もなかったけど、歴史の勉強に...と思つて初めて来たら、結構オモシロイ人生を歩んできてたんですね。決して男前とは思えないけど、当時はさぞかしモテたでしょう。暗殺つて痛いどころじゃないんやろなあ...。
(7月26日 Y.Y 女性)

坂本龍馬の手紙をたくさん見ました。とても手紙を書くのが好きです。今だったら僕とメル友になってもらえたかな？坂本龍馬の旅の多さにも驚きました。僕はそれを見習って世界を駆け巡りたいです。
(8月2日 愛知 T.A 10歳 男子)

私はあなたがうらやましい。何故、必死に生きられたのかを聞いてみたい。33歳で亡くなったのは、本当に悲しいと心底思いますが、でも夢を追いかけ、たった一つの人生を必死に生きられたあなたが本当にうらやましいです。私は54年生きて、何のために生きてきたのか、よく分からないのです。何のために生きていけばいいのか分からなくて苦しんでいます。あなたの像を見て、

この記念館で龍馬さんのことを知ろうとするうちに、ますます分からなくなりました。政治家であったのかなというのが今までの印象。しかし、ここで分かったことは、龍馬さんは随筆家・エッセイストかな、ということ。数々の人にあてたたくさんの手紙がそれを物語っています。まあ、それだけ奥が深いということかな。これからは自分が出会う色々な場で、龍馬さんの勉強をしてみようかな。
(8月10日 三重 E.K 49歳 女性)

こんにちは、神戸に住む現在22才の大学生です。高校生のときに司馬先生の『龍馬がゆく』を読み、すっかりこの国をまわることができました。僕の中であなたは永遠の憧れであり、目標でもあります。いつまでも、僕の中の輝き続けてください。
(8月10日 兵庫 S.S 22歳 男性)

あなたのようないい意思の強さを見習って、はるばる神奈川県横浜市から自転車で7日間かけて高知県にたどり着きました。いろいろな峠を越えてこちらまでたどり着きましたが、一つ

太平洋を見て、力をもらって、何とか生きています。でも私の人生、私自身が見つけなければいけないのです。がんばりたい。
(8月8日 高知 H.M 54歳 女性)

何度訪れても、心が洗われるようです。妄想故郷桂浜。あなたの見つめる景色をいつまでも美しく保てるよう、素敵な未来にしていきたいです。何十年、何百年先も、桂浜からの雄大な景色を見ていてください。また来ます。
(8月16日 大阪 H.O 30歳 女性)

太平洋を見て、力をもらって、何とか生きています。でも私の人生、私自身が見つけなければいけないのです。がんばりたい。
(8月8日 高知 H.M 54歳 女性)

***** 編集者より *****
今年の夏休みもたくさんの方にご来館いただきました。明るいニュースよりも、暗いニュースの方が多く感じられるこの頃ですが、来館される方たちも色々な不安を抱えていらっしゃるようです。7月30日に発売した『ほいたら待ちゆき 龍馬』は、何かに悩んでいる時はもちろん、そうでない時にもたくさんの方の力をもらえる一冊です。おすすめ！

200万人・思いの結集

構えずにゆったり、ばらばら

「ほいたら待ちゆき 龍馬」はイスに座ってじっくりと読む本ではありません。通勤電車で揺られながら、病院での待ち時間に、なかなか眠れない夜に...、あまり構えずにゆるい気持ちでばらばらとめくっていただきたい、そんな本です。

本の読み方も自由ですが、おススメの読み方をいくつかご紹介いたします。

①インスピレーションで読む

メッセージには一つ一つに見出しがついています。まずは本をめくり、目にとまったものから読んでみてください。

②時代の流れをみながら読む

各年の最初のページに、その年に起こった国内外の出来事掲載しています。そのニュースを読んで、皆さんのメッセージを読んでみてください。

③ドキュメンタリースタイルで読む

毎年、桂浜の龍馬像に会いに来



読み方はいろいろ

て、当館で龍馬へのメッセージを残していく方がたくさんいます。「近況」に「(年月日)にも来館」と表記しているメッセージを見つけたら、迷わずそのページへ。龍馬に憧れ、龍馬と共に人生を歩んでいる人々の、力強い生き方に触れることができます。

これまでに龍馬記念館を訪れた二百万を越える人々の声が集まったこの本には、共感できるもの、「そうかこんな考え方もあるんだ」と思われるもの、中には理解できないものもあると思います。これらのメッセージを読み進むうち

に、自然と、自分の心に響くメッセージに出会うはず。そのメッセージから、何かを学んだり、励まされたり、勇気や元気をもらえるのではないかと思います。

ぜひ一度本を手にとってみてください。そして、お気に入りのメッセージを見つけてください。

「ほいたら待ちゆき 龍馬」より

今日は私の成人式なのにもかかわらず、龍馬サンに会いに来ました。私は龍馬サンと緒の高知出身ついでに誇りに思います。高知ってなんちゃあないけど、龍馬と二緒の海を見れるだけで幸せです。まだまだ20才！世の中を変えられる人になれるかな？龍馬は28才で動き出してこの実績。負けられね。龍馬男前ワッショイ！

←その後
今は高知を出て大阪で暮らしています。田舎ですつといろいろではなく、龍馬みたく色々な世界を見たかったからです。ここで一つでも、何かを吸収して帰りたいと思います。

記念館のホームページ、ご覧になった事ありますか？

記念館のホームページは1999年11月に開設されました。2004年2月にリニューアルし、おかげさまでアクセス数は224万件を超えています。2010年の大河ドラマ「龍馬伝」に決まり、リニューアルの必要性を感じていた今年7月、「記念館のホームページを作りたいんですが」という突然の申し出から、「高知県立坂本龍馬記念館Webサイトリニューアルプロジェクト」が発足しました。マニュアル本片手に更新を続けて10年「情報量はあるけどデザイン・操作性が良くない。多くの人が見えてくれているのにもったいない。」それが今の評価でした。会のメンバーは専門家と館職員で構成され、ホームページの目的と目標を設定し打ち合わせを重ねています。今後もデザインの検討や新コンテンツの作成に向けての企画書提出など、専門的な知識や手順を教わりながら、プロジェクトは進行しています。どんなホームページになるのか、来春公開に向けて夢は広がるばかりです。

渡辺 曜子



▲「現在の高知県立坂本龍馬記念館公式サイトのTOPページ」

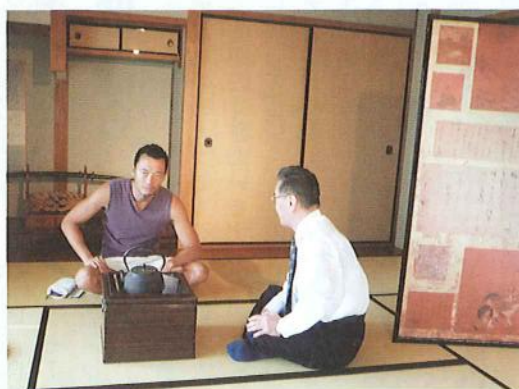
夏休みのお遍路さん

(中田宏・横浜市長一家)

八月上旬、お遍路さん一家がやってきました。夏休みを利用して四国八十八カ所を毎年少しずつ回っている、横浜市長の中田宏さん一家です。

中学生と小学生の二人のお嬢さんもお遍路姿でお父さんと歩いて巡礼。「何年かかってようやく遂げる」と夏の暑さもなんのそのといった感じ。大の龍馬ファンの中田市長は、夏休みの宿題で龍馬研究をしたという娘たちの様子に目を細めていました。

前田 由紀枝



▶龍馬気分分で森館長と話が弾む
中田市長(左) || 記念館2階の「近江屋」で

「新しい出会いの風が、 もう一つの展示会に」

八月一日から一ヶ月間、海の見えるぎやらしいにて谷内信之氏と森謙次氏の作品が約30点「珊瑚とジュエリー」和のコラボレーション」と題して展示されました。谷内氏は珊瑚に銀製品を中心としたジュエリーで「和と龍馬」を、森氏は珊瑚の他に鯨歯・猪牙・鹿角・木彫を使用して根付を中心に「ユーモア」を、それぞれ表現したものでした。

小さな作品が作り出す二人の世界は、無限の広がりとなり面白さを十分味わうことが出来るコラボレーションとなりました。

中村 昌代



▲ギャラリーで開いた珊瑚とジュエリーのコラボ展

龍馬を学んで 大きくジャンプ

(矢崎総業国内サマーキャンプ)

今年で三回目の夏休み恒例のサマーキャンプ。二班に分かれてやってきた小学生二百十九人は、リーダー五十八名と一緒に四泊五日の日程で龍馬を学びました。

「広い視野を持って何事にもチャレンジできる人間になってほしい。それには高知で龍馬を感じながら学ぶことが一番です。海外でも活躍できる人になってほしい」というリーダーとともに、小学生たちは記念館で熱心に勉強しました。

前田 由紀枝



▲近江屋の中で龍馬暗殺の話などを聞くキャンプの子どもたち

入館状況

2008年9月20日現在(開館以来6,110日)

◆総入館者数	2,190,574人
◆2008年度最多入館	5月4日 2,321人
2008年度最少入館	7月1日 73人
2008年度1日平均入館者数	407人
◇最多入館	1993.5.3 3,700人
◇最少入館	2004.10.20(台風のため) 8人

編集後記

動き実感!館が動いている。念願の入館者が龍馬に寄せた手紙「拝啓龍馬殿」が「ほいたら待ちゆうき 龍馬」と題名を変えて一冊にまとまった。販売開始。インターネット検定「中級」=有料=もスタートした。さすが挑戦してくる皆さん手ごわい。そればかりではない。続いて小学生向け「龍馬紙芝居脚」に「現代龍馬学会」立ち上げ準備とスケジュールが並ぶ。休む間なし。「えっ、早、秋の陣!」思わず天を仰いでいる。(モ)

館だより「飛騰」第67号(年4回発行) 表紙題字:書家 沢田 明子氏
発行日 2008(平成20)年10月1日
発行 高知県立坂本龍馬記念館
〒781-0262 高知市浦戸城山830
TEL(088)841-0001 FAX(088)841-0015
http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~ryoma/
「飛騰」に対するご意見ご感想などお寄せください

開館時間 9:00~17:00 年中無休
入館料 一般500円・高校生以下無料
(特別企画展料金のため)

館だより「飛騰」は、郵送料のみのご負担でお届けいたします。ご希望の方は、90円切手5枚をお送りください